

(5)畜産

令和2年2月現在の牛の飼養戸数及び頭数は、乳用牛が660戸・52,100頭、肉用牛が841戸・79,800頭、平成31年2月現在の豚及び鶏の飼養戸数及び頭羽数は豚が105戸・406,000頭、採卵鶏が56戸・6,196千羽となっています。昭和50年代以降、農家戸数は減少しています。

令和元年の農業産出額は、乳用牛の第2位(437億円)をはじめ、肉用牛が第9位(228億円)、豚が第8位(258億円)、畜産全体が第7位(1,156億円)と全国有数の畜産県となっています。

本県畜産はこれまで、環境との調和を図りながら、家畜の生産能力の向上、低コスト化、飼養技術の高度化、自給飼料の生産拡大などにより畜産経営の安定化・体質強化を図ってきました。併せて、輸入畜産物による本県畜産への影響が最小限になるよう、経営規模の拡大を進め収益力の向上を図り、国際化に対応した畜産経営を確立する必要があります。

また、高病原性鳥インフルエンザや口蹄疫等の家畜伝染病発生防止や農場HACCPの認定促進など、家畜衛生対策を徹底することも重要です。

家畜の飼養戸数・頭羽数の推移

(戸、頭、羽)

畜産区分 年次	乳用牛		肉用牛		豚		鶏			
	飼養戸数	飼養頭数	飼養戸数	飼養頭数	飼養戸数	飼養頭数	採卵鶏		ブロイラー	
							飼養戸数	飼養羽数 (×1,000)	飼養戸数	飼養羽数 (×1,000)
全国 H31	14,400	1,352,000	43,900	2,555,000	4,320	9,156,000	2,120	182,368	2,250	138,228
栃木 S55	3,100	60,600	5,230	57,000	3,700	254,900	4,430	2,891	95	1,543
S60	2,440	65,000	5,320	86,000	2,020	302,600	1,520	3,527	69	1,508
H2	1,990	66,940	3,880	103,720	960	307,330	1,100	3,946	40	906
H7	1,570	64,100	2,680	103,900	410	303,500	170	4,328	25	626
H12	1,300	60,700	2,000	105,200	270	319,600	115	4,258	25	497
H17	1,150	58,300	1,570	98,100	196	336,500	101	4,256	19	376
H22	998	53,900	1,360	99,100	139	368,840	108	3,974	19	
H28	785	52,800	954	81,200	112	394,600	62	3,505	12	
H29	748	52,100	925	82,200	112	399,200	62	4,620	12	
H30	725	51,900	889	81,500	105	403,400	58	5,164	12	
R1	690	51,900	864	79,600	105	406,000	56	6,196	12	
R2	660	52,100	841	79,800						
全国順位	3位	2位	13位	8位	12位	7位	14位	12位	28位	-位
1位の都道府県	北海道	北海道	鹿児島県	北海道	鹿児島県	鹿児島県	愛知県	茨城県	宮崎県	宮崎県
全国に占める割合	4.6%	3.9%	1.9%	3.1%	2.4%	4.4%	2.6%	3.4%	0.5%	-%

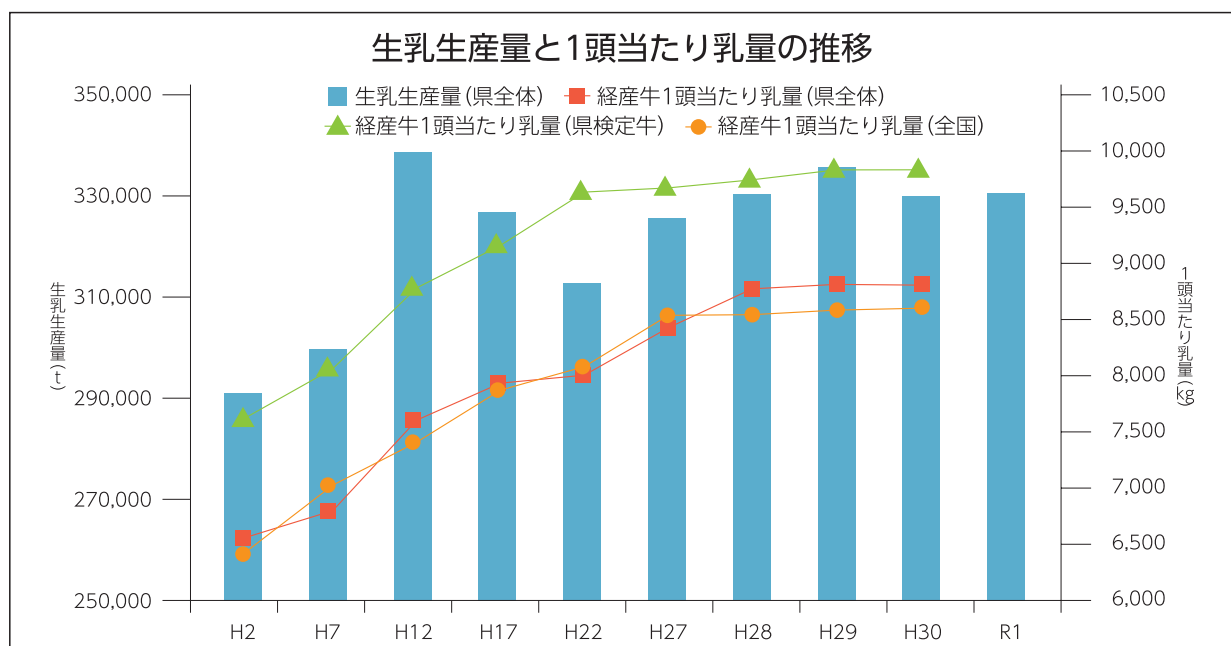
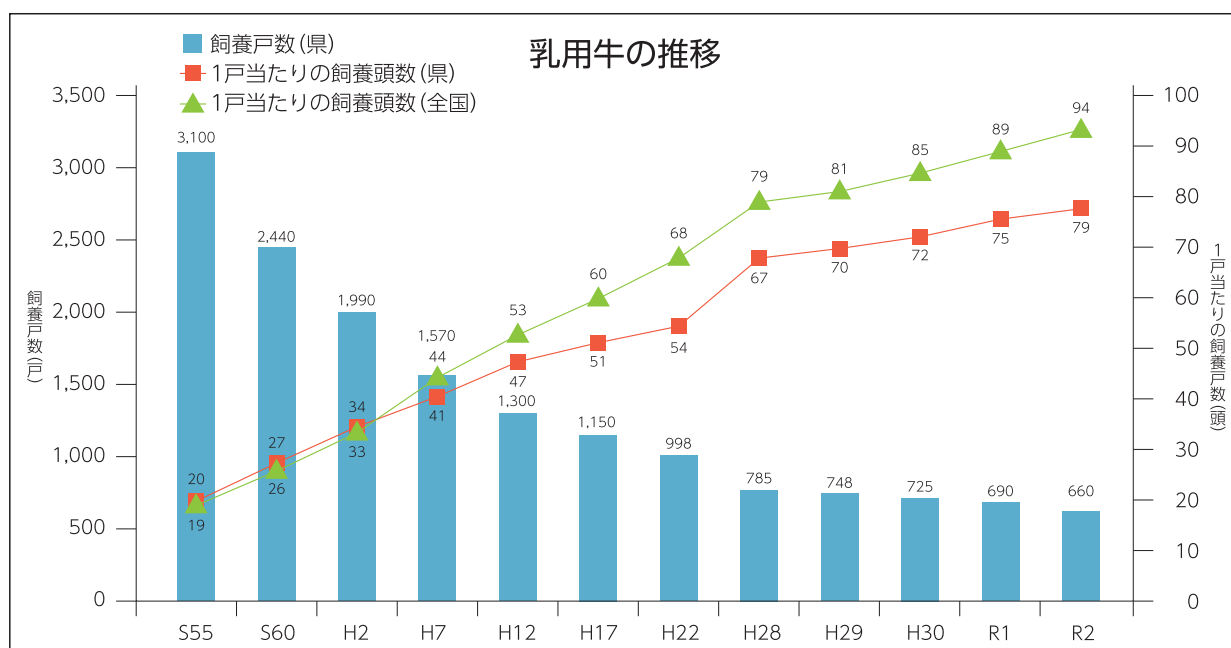
【乳用牛】

乳用牛の飼養戸数の減少は続いていますが、令和2年の1戸当たりの飼養頭数は78.9頭で増加傾向となっています。

本県の乳用牛飼養頭数の全国シェアは、増加傾向で推移しています。

令和元年の生乳生産量は330,598tで、平成11年以降、北海道に次いで全国第2位となっています。本県の生乳生産量は平成21年以降微減傾向となっていました、24年からは増加傾向で推移しています。経産牛1頭当たり乳量は増加傾向で推移しており、特に牛群検定に加入している牛は、県全体の平均乳量と比較して約1,000kg多くなっています。

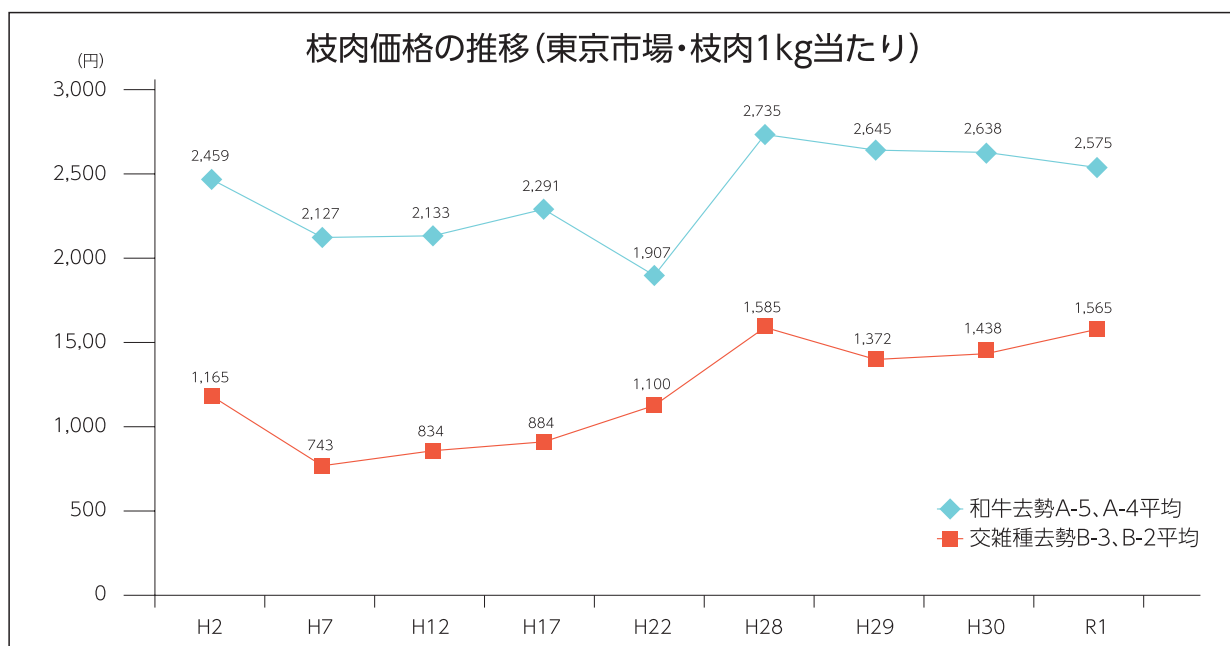
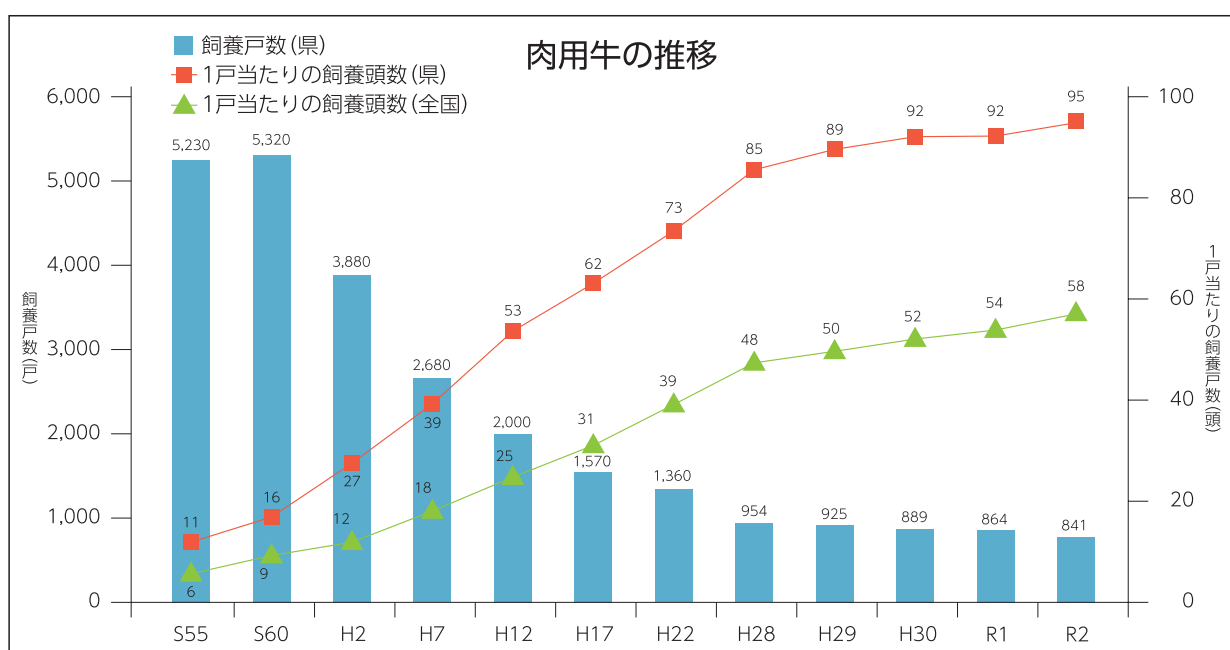
今後も、乳用牛の改良による生産性の向上と牛群検定の普及促進による適正な飼養管理技術の推進とともに、飼養管理技術の高度化に資する機械導入等による労働負担軽減や省力化、持続可能な資源循環型酪農を推進していく必要があります。



【肉用牛】

肉用牛の飼養戸数の減少は続いていますが、令和2年の1戸当たりの飼養頭数は95頭で、増加傾向で推移しています。令和2年の和牛子牛出荷頭数は8,097頭で、こちらも増加傾向で推移しています。枝肉価格は、新型コロナウイルスの影響で外食向け需要の落ち込みにより、大幅に下落したものの、政府の補助事業やGoToEatキャンペーンなどの影響もあり、回復傾向にあります。

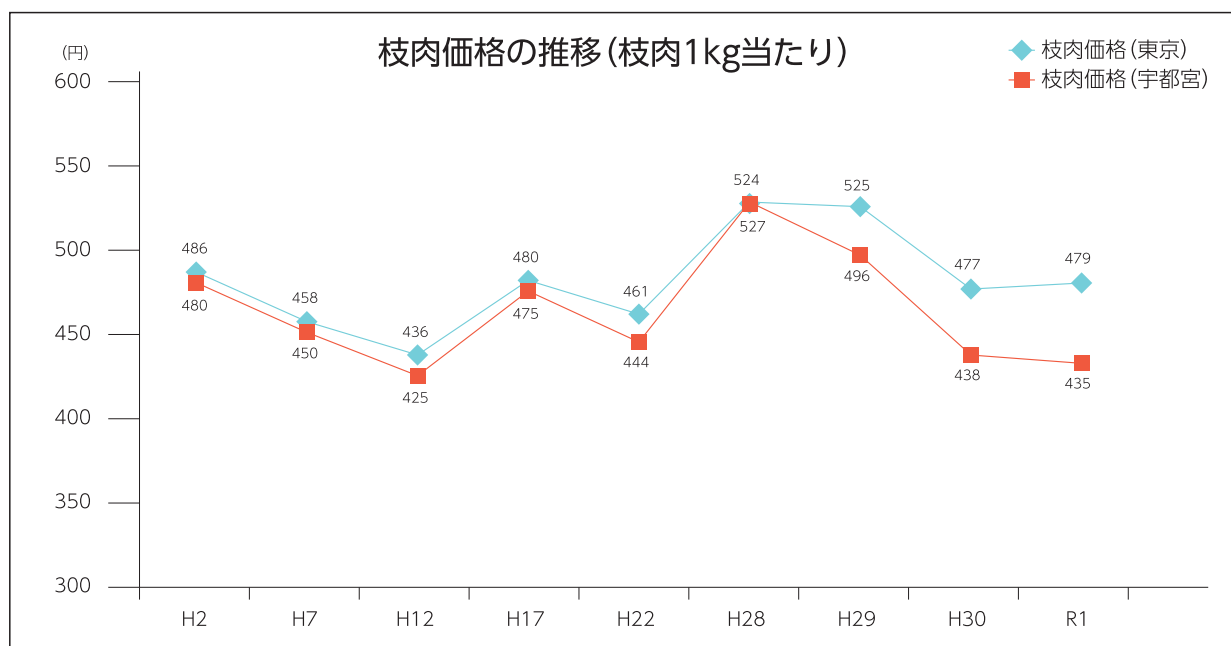
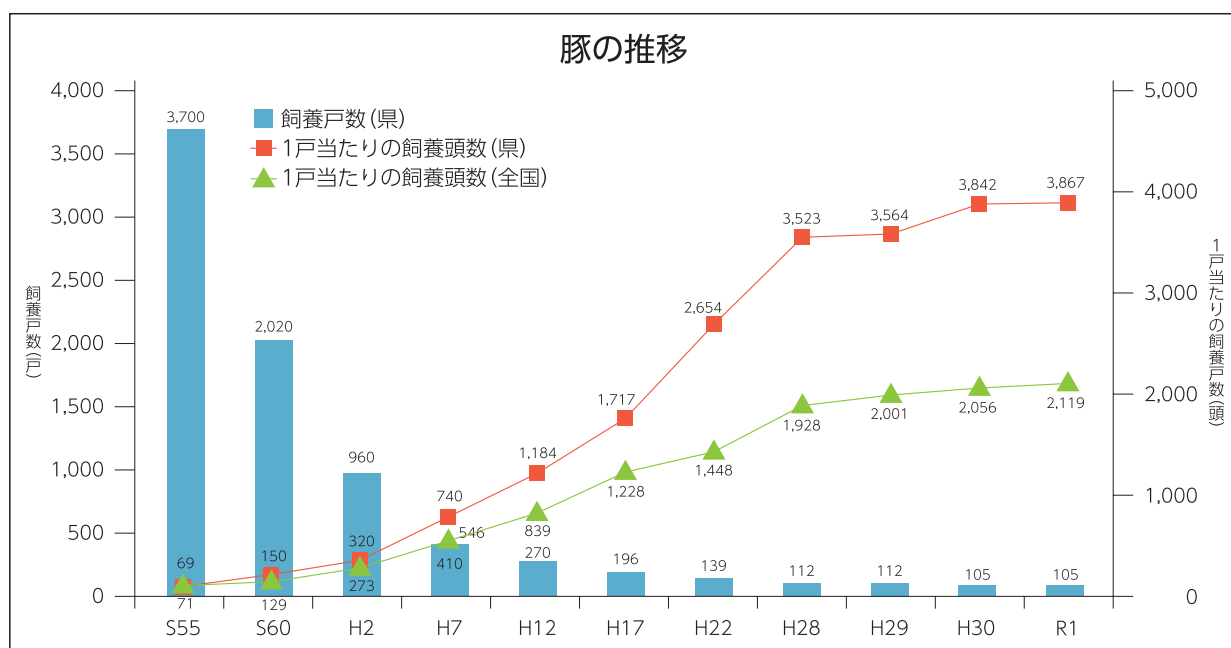
今後も優良繁殖雌牛の導入や受精卵を活用した和牛子牛生産基盤の確立、肉質診断に基づく品質向上や特色ある牛肉生産の推進、及び稲WCS・飼料用米の利用拡大など水田を有効活用した飼料自給率の向上などにより、本県肉用牛経営の強化を図っていく必要があります。



【豚】

豚の飼養戸数は急速な減少を続けた反面、専門化と規模拡大が特に進み、平成31年の1戸当たりの飼養頭数は3,867頭と、昭和55年の50倍以上になりました。

養豚経営は、家畜伝染病や暑熱などの自然要因、枝肉単価、飼料価格の変動など社会的要因の影響を特に大きく受けることから、今後も、防疫対策の徹底をはじめ、育種価による遺伝的能力評価や優良種雄豚等の導入等によるおいしさを追求した豚肉づくりや国産飼料の利用等を推進していく必要があります。



事例 豚熱(CSF)ワクチン接種始まる

平成30年9月に岐阜県で発生した豚熱が、翌年9月には関東地方まで感染拡大したことを受けて、本県の養豚農家を豚熱から守るため、令和2年2月17日に予防的ワクチン接種を開始しました。初回接種は手数料を免除し、家畜保健衛生所等の獣医師職員が民間獣医師等の協力を得ながら同年5月15日までに29万7千頭の接種を完了しました。

その後も月1回以上のペースで養豚場に立ち入り、産まれてきた子豚など毎月約7万7千頭への接種を継続しています。

適正なワクチン接種を徹底するとともに、消毒など養豚場の衛生対策や、野生イノシシ対策も講じながら豚熱対策に取り組んでいます。



子豚へのワクチン接種



母豚へのワクチン接種

事例 JAうつのみや「四つ☆子牛プロジェクト」による子牛育成技術の高位平準化(河内地域)

河内地域の和牛繁殖農家における繁殖基盤を強化するため、JAうつのみやと河内農業振興事務所が連携し、高品質な子牛生産に取り組んできました。

具体的な取組としては和牛肥育農家の意見を取り入れ、第一胃の発達に重点をおいた「子牛の哺育・育成マニュアル」を作成しました。また、マニュアルの効果検証及び生産者の意欲向上を目的に「四つ☆子牛プロジェクト」を実施しました。これは、矢板家畜市場において子牛の体高、胸囲、腹囲等を測定し、基準を満たした牛を「四つ☆子牛」と認定する制度です。

これらの取組により、子牛の日増体量が0.92kg/日(平成27年度)から0.98kg/日(令和2年度)に増加しました。今後も、JAうつのみや、肥育農家との連携を継続し、本地域から出荷される子牛が高いレベルで均一化できるよう、プロジェクトに取り組んでいます。



矢板家畜市場での子牛の胸囲測定



四つ☆子牛プロジェクトの結果様式(農家配布用)

事例 芳賀南高地区耕畜連携協議会による粃米サイレージの取組(芳賀地域)

芳賀地域では、令和2年度に初めて「粃米サイレージ」の生産調製が行われました。

粃米サイレージは通常の飼料用米と違い、収穫した粃米を破碎・調製して密封するもので、玄米にするための乾燥や粃すりの過程が必要ありません。また、フレコンバッグに詰めて保管してあるため遠方の飼料会社まで輸送せず流通させることができます。そのため、畜産農家からは低コストの濃厚飼料として、耕種農家からは省力的な作付形態として双方から注目されています。

芳賀南高地区耕畜連携協議会では、これまでも畜産クラスター事業を活用して複数の畜種を混合した良質堆肥の生産や耕種農家へのほ場散布、稲わらの収集を行っていましたが、地域の耕畜連携と土地利用型農業を、更に一步進めるための取組として期待されています。



飼料用米(生粃)破碎機



粃米サイレージの袋詰め